

内山完造と同時代日本へのまなざし

菊池敏夫

今回書き起こした完造さんの雑記の後半部分は敗戦1周年前後の時期に書かれたものである。ここでは日本が戦争に至った要因、戦後日本のあるべき姿や理念について哲学的な思惟、思索が多く綴られている。「中国漫談」というよりは「日本漫談」といった方がよいかもしれない。その幾つかをかいつまんで紹介し、若干のコメントをしておきたい。

完造さんは19世紀、アメリカの作家・社会主義思想家であるエドワード・ベラミーの『回顧録』を取り上げている。険しい坂道を登る巨大な車があり、その周囲を無数の曳子群が取り巻いてこれを引き上げている。乗客は涼しい微風を受け美しい景色を眺めて楽しそうである。彼の地位は安楽ではあるけれども、いつ車から滑り落ちるかとはわからない。滑り落ちたが最後、彼も曳子になるほかはない。しかし滑り落ちなければ彼は曳子のことなど省みることはなく、曳子の存在を不可視化し我が身のみを視るようになった。これは資本主義の生産関係を譬えたものである。乗客は資本家であり、曳子は労働者である。そしてこの譬えは明治維新以降、戦前の日本の軍閥、官僚、資本家によって追い求められた尚武一点張りの国家像、世界をどうするかを考えるべき時に東亜のことしか考えられなかった「大東亜戦争」敗戦の要因と通底している点が重要であると完造さんは捉えている（「遂に来るべきものが来たらしいアー」）。これに対するアンチテーゼの国家像としてスイスとオランダを取り上げている。スイスは、人口400万人の小国で、国土も小さく、山岳が多く、耕地も少ない。水力は多いものの、原料に乏しく、農業で自立もできない。そこで「低賃金を利用して大量製産を企てた」日本とは逆に、この条件に合った精密工業で立国している。周囲を多くの国と接しているので思想的にも、教育的にも国際性をもって世界に対応している。また列国もこれを認めて永世中立国としている（『スイス』に就いて）。『花甲録』では、「私が日本の無条件降伏にあたって、日本の将来は永久中立のスイスに学ぶより外に道のないことを考え」た、と述べている（岩波版10頁）。オランダについては、「産業上に於いて此台湾よりも少し小さい位イの国がどんな事をして居るか考えてみる必要がある」とし、非常に低地なため排水が必要であるけれども、西部では酪農、農芸が盛んで、乳製品や球根演芸は世界的にも高評価を得ている。また炭田、水力を欠き工業発展ができないので、漁業に活路を求めたと指摘し、日本再建のための好参考と評した。

「吾等の鏡」ではゲオルク・カイゼルの戯曲「カレーの市民」を取り上げている。カレーとはドーバー海峡を挟んでイギリスの対岸にあるフランス北部の港町である。1347年、カレーはすでに1年もの間イギリス軍に包囲されていた。イギリス王から町を破壊されなくなったら翌朝までに6人の生贄の市民を差し出せという要求があった。この戯曲は、この危機に市民がどう生き抜いたかを扱っている。市民の間には軍の隊長はじめ、武器を取って戦おう、ともに死のう、という声が多かった。そのときある男が異議を唱え、カレーの港は多くの人に幸福をもたらしていてわが命よりも貴く、戦闘を避けるべきだという。人々は彼を臆病者と罵ったが、次第に賛同者が増え、誰が生贄になるかが問題となった。この男を初め7人が名乗りを上げた。だがそのなかに隊長はいなかった。翌朝生贄になるために6人が町の広場に到着したが、例の男はやってこない。皆がだまされたと思ったとき、彼の父親が息子の棺を

引いて現れた。6人は魂を震わせながら生贄となる決意を固めた。この噂を聞いたイギリス王は彼らの命を絶ってはならぬと命じ、カレーの港も市民も救われる。これがこの戯曲の粗筋である。煽るだけ煽って責任を取らない隊長のような人物ではなく、この7人の犠牲者のような人々が出てくる社会に戦後日本はならなければならない、と完造さんはいっているのである。またカレーの市民の在り方は、完造さんにおいては「切支丹殉教」とオーバーラップする。すなわち内田魯庵を引いて「日本の仏教史にも迫害はあるが、然し仏教徒は大抵迫害に対して勇敢に戦ってゐる。之に反して、切支丹宗門は無抵抗の教義を奉じて従順に迫害の運命に服してゐる。夫れ丈け愈々悲惨であること。同時にいよいよ壮烈であること」と述べ、仏教徒と切支丹とにおける闘い方の相違を説いている（『切支丹殉教への讃辞』）。さらにこの根源には、「女大学」をそのまま一生を通じて実践した、完造さんの母親・直さんの忍従と無抵抗の生き方があったと私は考える（『花甲録』岩波版9頁）。

「個人」の概念が国民の間に広く浸透することによって初めて民主国家の建設が可能となるという考え方が述べられる。すなわち一人ひとりの生死は人に代わってもらうことができない。また一人ひとりの喜び、哀しみ、苦悶も個人のものである。この個人的自覚の上に自らが主人であること、自主自治の人がつくられるのであって、これが真の自由人である。その自由人が自由国家をつくり、それが民主国家の礎となる。その民主国家によって初めて平和主義が実践できるという考え方である。ここで完造さんは改めて「正しいとは国家の命令に服従すること」「正しいとは天皇の勅命を十分守ること」など個人が国家、権力に従属し、おぼろげな存在となってしまう時代の「教え」を書き添えている（『新日本人』）。

今の時代でいうならばジェンダー論とでもいうべき議論がいくつかなされている。一つは「婦人と読書」の文章である。従前の日本では夫は旦那様、主人といった具合で、妻の地位はなく、夫の所有物の観があったという。マッカーサーによって婦人に参政権、選挙権、被選挙権が与えられて30人余の婦人代議士が生まれた。こうした時代の婦人には知識を吸収するための条件が必要であって、それが読書の時間である。家庭で妻がそれを可能とするには夫がそのための時間をつくってやるのが急務だと主張している。今一つ文章は「若い夫婦一特に夫たる者へ」である。ここでは、若い夫婦の家庭生活、社会生活におけるあるべき姿を論じている。一軒の家には家族の誰がしてもよい公の仕事がある。ところが家の中の仕事は妻がするべきだと考える人が多い。しかし妻の仕事は多すぎて、読書する時間もないというのが現実である。そこで妻を解放する手立ては先ず第一に妻の経済的自立を援助することにあるとして、完造さんが妻のみきさんに書店を開かせた事例を紹介している。みきさんが書店に集中すると家の中のことはできなくなる。それを完造さんが助ける。同じ理屈でみきさんの読書のための時間をつくることにも努力したというのである。独立した経済がなければ妻の自由、解放はない。若い夫婦の人たちは、妻が知識を持ち賢くなければ家庭の和楽はないと心得なさい。家庭の和楽は妻を賢くすることにある。若いうちに男女ともに、夫婦ともに読書をし、知識の向上を図り、道徳の立脚点を確かなものとして家庭に、そして社会に対応しなければならぬ、と完造さんは言うのである。この文章は、実にくどくどとしたもので、一見完造さんが「今の若者達は」といった具合に、若い夫婦に対して執拗に説教をたれている観がなくもない。しかし私はそれは少し違う気がしている。その理由の一つはやはり完造さんの母親である直さんの生き方である。彼女の父親は井原で印判屋を営む荻田長三といい、郷校興譲館主阪谷朗廬の門下で儒学を修めた人物であった。彼女はその長女であり、父親の厳格な指導のもとで女性としての躰を身に付けていったと思われる。また夫の賢太郎さんは芳井村の村長を務めたほどの人であったけれども、家族が麦飯を食べるなかで独り白飯を食べ、気性は短気で我がままで手が早かったという（『花甲録』岩波版9～10頁）。そのようななかで彼女は「柚の木を逆さに登れと云われても口を返してならん、それが女の道である」が口癖で、無抵抗の人生を歩んだ人であった。それを直視して成長した完造さんは、この母親から無抵抗の精神と「感動し、よく泣く」ことを遺伝として受け継いだ

という。しかし、他方で母親に対する同情と愛情は計り知れないほど深いものがあり、この母親の姿を脳裏に焼き付けて、どうすれば家庭の妻の解放が可能となるのかを長年にわたって考え続けたに違いない。広義のマザー・コンプレックスといってもよいだろう。日本の敗戦はそれを解決し実践できる好機であった。そのようななかで、夫や男性の役割も新しく、確かなものとならざるを得ない、それが妻や女性の解放と自立にとって不可欠であると完造さんは考えたのである。

この時期の雑記には、キリスト教の教えや読んだ本に由来する解説、感慨のようなものも多い。

その一つに「肉食はせんがよい」がある。『創世記』に「神は万物を人間に与へ給ふた」とあり、その信仰に立つヨーロッパのキリスト教徒は非常に勇敢に人類の幸福を目指して活動してきたのだけれども、神が人間と同時に創造したはずの自然界の鳥獣虫魚を人間が殺して食べるのは人間の得手勝手ではないか、という考えを述べている。これは開発・発展を是とする西洋近代に対する疑問、批判であり、資本主義世界における無限の経済成長に対して、1970年代から巻き起こったところの、これを疑問視するポストモダンの思潮の先駆けとも見えて興味深い。

また「偶像への理解」は、泉鏡花『春昼』から非常に長いくだりを引用し、近代思想における偶像の扱いを論じている。近代思想は偶像の破壊とか形而上学とかいって仏像をただの偶像として扱う。偶像に靈魂はないけれども、しかしひとたび靈魂があると言えば人は迷ったり悟ったり拜んだりするではないか。凡夫は是がなければ弓は引けない。軽業師は客がなければ修行はしない。恋人は焦がれるだけでよいのか。結婚も身体は不要であろうか。何事もただの観念だけでは成り立たないのであり、具体が必要である。かくて偶像は信仰的であるのだと結んでいる。

さらに「人と生物」では人間の本能に言及している。人間以外の生物は本能の生活一点張りであるけれども、人間は非常な叡智をもって生きる存在である。しかしその人間も実は他の動物と同様に本能を持っている。その一つに性欲があり、その強さは実に強力で、時としていかなる叡智、賢明そして道徳、倫理をも踏みにじってしまうことがある。ヨーロッパの小説にはそれがはばかることなく描かれ、それがテーマになることもある。例えばジャンクリストフは倫不倫や道徳不道徳の何たるかをよく知る人間であるけれども性的本能の虜になってしまう。本能の絶対的強力を描いた『ジャンクリストフ』について完造さんは、正に血の通った人間を描いている、と評している（「ジャンクリストフを読んで」）。「本能は神からの賜物である、自然である、善でも悪でもない」という理解が根底にある（「人為か自然か」）。